

テーマセッション6

「家族同心球環境モデル」の視座から「異文化家族看護学」構築に向けて
—家族機能の量的・質的な通文化研究からみえる日本家族への家族看護—

法橋尚宏（神戸大学医学部保健学科小児・家族看護学）

1. 社会文化的コンテクストからの家族アセスメントに適した「家族同心球環境モデル」

国境ボーダレスの時代を迎え、在日外国人および海外在留邦人数は増加しており、家族の異文化接触が注目されている。これらに伴い、人々の行為を支配する価値観や信念である文化を基盤として家族を看護するために、所謂「異文化家族看護学」の確立が望まれる。同時に、看護職者自らが自分の文化を知り、家族をみる枠組みを再確認する姿勢が重要になっている。

家族は、家族を中心として同心球様に内外側に広がる環境の中でそのニッチ (niche) を確立しているが、筆者はこれを「家族同心球環境モデル」として新しく提唱している。家族は、取り囲まれる外部の人的・物的・社会環境と常に相互作用しているので、家族と三次元環境を一体化してホリスティックに家族を捉えなければならないと考える。さらに、家族看護介入にあたっては、家族が置かれている環境の中に入り込み、そのエコロジーに即した援助構造を作り出していくことが必要である。

さて、家族アセスメントには構造と機能のアセスメントが欠かせないが、家族の内的構造にはジェノグラム、外的構造にはエコマップというツールがある。家族の機能についても、筆者が持論とする家族エコロジカルモデル（家族看護学研究, 10 (3), 2005）では、家族員に対する対内的機能、社会に対する対外的機能があり、「家族同心球環境モデル」に立脚したアセスメントが不可欠であろう。

2. 日・米・中における家族機能の通文化研究から浮かび上がる日本家族の実像

家族の対内的機能と対外的機能を定量化できる家族機能尺度 FFFS (Feetham Family Functioning Survey) を用い、入通院する病児をもちファミリーサポートハウスを利用する母親からみた家族機能の日米比較では、「家族とサブシステムとの関係」における家族機能充足度が日本のほうが低い傾向などが明らかになった（家族看護学研究, 10 (1), 2004）。これは、家族員とそれ以外の人々との間に明確なバウンダリーがあるという日本家族の特徴（ウチとソトの概念）と関連していると考えられた。

香港では核家族化、晩婚化や少子化、女性の就業化が日本以上に進んでいるという社会文化的背景がある。エスノグラフィーを用いた香港の養育期家族の家族機能に関する研究では、「家族と家族員との関係」では、家族規模の縮小により家族員の関係がより密接であった。「家族とサブシステムとの関係」では、両親やアマ（外国人家事労働者）と強い関係にあり、家事や育児を任せている一方で、近隣とは疎遠な関係にあった。「家族と社会との関係」では、共働きで長時間労働という点から会社との関係が最も強いことが明らかになった。

さらに、日本家族と香港に家族帯同赴任中家族の家族機能の日中比較なども加えて、日・米・中において実施した家族機能の量的および質的な通文化研究（小山智佳子、本田順子、赤木純子との共同研究）の成果をもとにテーマセッションを進行する。異文化の視点から家族をアセスメントすることで、多文化社会にある日本家族の理解と家族看護の展開に役立てたい。さらに、「異文化家族看護学」の新たな構築に向けて、建設的な議論を交わしたい。